

研究・実践報告



「私の教育実践」

埼玉県立越生高等学校長

江森 幸夫

(昭和六十年 工学部応用化学科 卒業)

【はじめに】

最初に自己紹介をします。私は、昭和六十年に東洋大学工学部応用化学科を卒業しました。現在は理工学部となっていますが、当時は工学部でした。そして現在私は、埼玉県立越生高等学校で校長を務めております。

応用化学科であったため、周囲の学生はほとんどが民間企業に就職をする中で、なぜ教員になったのか話したいと思います。

高校を卒業した私は、理科と数学が好きで、将来は理科に関係する仕事に就きたいと考え、応用化学科に進学しました。また、高校時代は三年間軽音楽部でバンド活動をしていました。大学でも四年間軽音楽に打

ち込み、楽しい大学生活を送りました。

大学卒業後の進路を考えた時に、親族や親戚に理科と数学の教員が多かったので、高校の理科の教員になりたいと思います。そのためにはどうしたらよいか調べました。当時の応用化学科では、高校の「工業」の教員免許は卒業と同時に取得できるのですが、「理科」の教員免許は取得できないことがわかりました。大学の授業の方に相談したところ、一年間聴講生で大学に残り、教育実習等の単位を取れば、「工業」の免許を生かして、他教科申請で高校の「理科」の教員免許が取得できると調べていただきました。そうして卒業から一年後に念願の高校理科の教員免許を取得したのです。

最初は埼玉県の私立高校に本採用として勤務したのですが、埼玉県の教員採用試験を受けて合格し、晴れて県立高校の化学の教員として、平成元年に採用されました。当時、応用化学科出身で埼玉県の県立高校の理科の教員となった第一号が私です。その時にはすでに二十六歳になっていました。教員としては、普通科の高校で三校、管理職試験合格後に主幹教諭として普通科の高校を二校、教頭として特別支援学校一校と普通科の高校を二校、そして現在の校長となって経験を積んできました。それでは、これから順を追って、私の教育実践及び教員として取り組んできたことを話します。

【教員としての基礎を作った時代】

私が県立高校で一校目と二校目に勤務した高校は、いわゆる生徒指導が必要で課題がある学校でした。当時の時代もあるのですが、服装・頭髪の指導が特に必要で、暴力行為等の指導も多く、教員の力量が問われる学校でした。元気な生徒が多く、古くは「スクール・ウォーズ」や「ビーバップ・ハイスクール」などのドラマ、最近では「今日から俺は」のドラマの世界そのままが学校で起こっていたと思ってください。ドラマのように笑いはないので、その現実には失望して、教職を去る先生も何人かおりました。そのような中で、生徒指導の若手の担い手として、教頭先生、生徒指導主任、学年主任の指導の下、やる気のある先生方と相談しながら学校の立て直しに取り組みました。

(一) 生徒指導の徹底

学校や教員に対して反抗的な生徒が、学校でやりたい放題をしている状況でした。その状況を改善するためには、生徒指導の徹底が必要でした。生徒からもアンケートを取ると、はじめに授業を受けたいと考えている生徒も一定数おり、その生徒たちのためにも安全で安心な学校にしていかなければならないと感じました。

最初からすべてを完璧に指導するのは困難なので、まず服装・頭髪指導の徹底から取り組みました。アンケートの結果や保護者の意見をプリントにして配布し、周知期間を設け、それ以降は指導を徹底しました。やる気のある先生方が毎朝正門に立ち、指導を続けました。「なぜ今までよかったのにだめなのか」などいろいろと反論や言い訳をする生徒もいましたが、「今までとは違う、全く新しい学校にするんだ」という思いで粘り強く指導し、少しずつ改善し、共通理解が確立されていきました。

次は授業規律の確保に取り組みました。高校では教科担当制なので空き時間があります。空き時間の先生でローテーションを組み、複数の先生で巡回を実施しました。一部の先生の授業で、授業妨害等やりたい放題

題にしている生徒がおり、職員室に連れてきて、粘り強く指導しました。その時も、中学校まではどんな成績であっても進級も卒業もできますが、高校ではしっかりと授業に取り組み単位を取得しないと、進級・卒業ができずに退学や転学する生徒が多くなることを粘り強く説諭しました。集団では教員の指導に従わない生徒も、一人一人個別に、将来どんな職業に就きたいのかなどじっくり話をし、その夢の実現のために、どのように行動していったらよいかを一緒に考えていったのです。そのような中で生徒との信頼関係を築きながら、少しずつ授業規律も確保されていきました。

中には、最初から高校に来るつもりはなく、働きたかったが、親や中学校の先生に高校は卒業しておくように言われたから進学したという生徒も少なくありませんでした。そのように、勉強をする意味を見出せず退学していく生徒も年間に数十人いました。中学校の教員になる学生たちは、その現実をしっかりと知っておいてほしいと思います。イギリスのことわざで「馬を水辺に連れてい

くことはできても、水をのませることはできない」とあります。ぜひ覚えておいてください。

そしてどのような指導も、まず根本に生徒指導があることを強く感じました。どんなに良い授業をしても、どんな良い講話をしても、それをしっかりと聞いて、受け止め、理解して行動に移すことができないと意味がありません。そして、最も大切なことは、あくまで生徒にとってどう行動したらよいかを考え、信頼関係を築きながら、きめ細やかに根強く指導し、生徒の変容に導いていくことではないかと思えます。

(二) 基礎学力向上と進路指導の充実

基礎学力向上のため、朝のホームルームの時間に週三回、国語の漢字、数学の計算、英単語の小テストを実施しました。ドリル形式のテキストを全員に配布し、テスト範囲をそのテキストのページ数で決めて教室に掲示し生徒の意識を高めました。また、基準点の六割に達しない生徒には、テストの復習プリントを用意し、

必ず提出させるようにしました。最初はしぼり取り組んでいた生徒たちも、内容は小学生高学年程度からの難易度のもので使用したため、取り組む意欲も向上し、学び直しとしても効果がありません。ただ、実施するのも、課題をやらせるのも手間がかかります。こちらが本気で取り組んでいる姿勢を見せて、きめ細やかに指導を継続しました。その結果、少しずつですが、基礎学力が向上し、欠点を取る生徒が少なくなっていました。

また、それまで学年の進路指導係が中心になっていた進路指導を、進路指導部が主導し二年間を見据えた、継続的なキャリア教育を推進しました。漠然と大学、短大、専門学校、就職と考えるのではなく、自分の興味関心や得意なこと、好きなことから、将来就きたい職業を考えさせ、そのために必要な力をつけるために高校時代しておくべきことや進学なのか就職なのか考えさせるように指導していきました。

この二つに取り進むことにより、中学までは授業についていけなかった生徒たちも、授業に主体的に参加

する生徒も出てくるようになり、欠点を取る生徒や退学する生徒が減少していくこととなりました。

(三) 部活動の活性化と生徒募集

次に、部活動の活性化と生徒募集の推進に力を注ぎました。学校の立て直しが、少しずつ軌道に乗り、徐々に学校に対する評価も変わってきました。

高校・大学と軽音楽部でバンド活動に取り組んでいた私は、軽音楽部の顧問として部活動の活性化に取り組みました。その当時は、どの学校でもそうだと思いますが、問題行動を起こすのは軽音楽部の生徒が多く、服装・頭髪は校則を守らず、顧問の指導にも従わないというのが定番でした。私が主顧問になった時も、部員が百人を超え、どの生徒も反抗的でした。そこで、最初のミーティングにおいて、軽音楽部は学校の部活動なのだから、これからは顧問の指導に従ってもらうこと、校則もしっかりと守り、様々な場面で学校に貢献するよう努力することを話しました。そして、顧問の方針に従う

気がないものは、他の部活に行くようにと話しました。約九十人の生徒たちが、「ふざけるな」「やっつけられるか」と暴言を吐きながら部屋から出ていきました。残った十人の生徒と、そこから新しい軽音楽部が出発しました。

残った部員の生徒たちに、今日から軽音楽部は「体育会系軽音楽部」を目指そうと話しました。そして毎回部活動の初めと終わりには、職員室前の廊下でミーティングを実施し、部長からの連絡と顧問からの指示や講話を実施しました。学校説明会の時は、野球部などの運動部の生徒と一緒に廊下や階段等を掃除し、中学生に配布する資料の印刷やとじ込みを軽音楽部の生徒が毎回担当しました。そのように変容していく生徒を見て、まず、体育の教員と管理職の先生方が、軽音楽部をほめてくれるようになっていったのです。

また、教務部の生徒募集担当として、中学校や学習塾、地域の方々へ、学校の良いところをこれでもかというくらいアピールして回りました。特に、学校案内は他校との差別化を図るデザインを考え、一目でその学

校だとわかるようにしました。内容も長い説明文をやめ、校長の写真も堅苦しいものから、笑顔で生徒たちと談笑しているものに変えました。最初は教務部の数人で中学を回っていましたが、全教員で行くようになり、学校全体の取り組みとなるよう推進しました。様々な取り組みによって、募集倍率も定員割れの状態から、数年で募集人員を数十名上回る志願者を獲得するようになりました。

また、うれしいことに軽音楽部の生徒たちの評判を聞きつけた地域の方から、町を挙げての夏祭りの野外ステージで、ぜひ演奏してほしいとの依頼をいただくようになりました。

【教科指導・進路指導の力をつけた時代】

二校目の学校で、学年主任を任せられ奮闘していた時に、初めて受けた人間ドックで病気が見つかり、ある臓器を全摘出する手術を受けました。そのため、入院・加療で約四か月病休に入りました。それが今から

約二十年前のことです。現在は完治して、元気に仕事をしていきますが、さすがにその時はシヨックで、様々なことを考えました。健康診断や人間ドックは必ず毎年受けるようにしましょう。早期発見、早期治療で完治する病氣も多くなりました。また、ストレスをためずに、自分なりにフレッシュする方法を見つけておく、とよいと思います。さて、病休から復帰した次の年度で三校目の学校に異動となりました。

この学校は、国公立大学にも進学する生徒も多い、進学校の男子校です。当時のセンター試験もほとんどの生徒が受けて、四年制の大学へ進学します。

(一) 進学に向けての教科指導

異動が決まった時に、真つ先に私が出したことは、本屋に行き、専門である化学の参考書と問題集を、詳しいものからわかりやすいものまで十冊くらい購入することでした。一般入試で大学に進学する生徒の指導をした経験はありませんでした。本当に高校の異動というのは、学校に

よっては転職に等しいくらいギャップがあります。

異動が決まった学年末休業日・春季休業日には、ひたすら教材研究に明け暮れました。とにかく、大学時代や受験生の時を思い出して、大学進学向けの授業の準備をしました。電話帳と呼ばれる、入試の過去問も勉強しました。

新学期になり、授業が始まると、生徒によっては、大学入試の過去問を持参して質問に来ることもあるので、睡眠時間を削って生徒が理解できるように教えるにはどうしたらよいか、常に考えて生活していました。その学校の校長先生が理科の化学が専門だったため、理系大学の進学に向けて、力を発揮してほしいといわれました。そこで、まず進学向けの補習を定期的の実施しました。それまでは伝統のある進学校ということとで生徒の自主性に任せており、部活動も盛んなことから、進学補習等には実施されていませんでした。OBの先生も多かったため、勉強は生徒が自ら進んでするものだという考えの先生が多かったです。そのため、進学実績は下降しており、生徒募集

倍率も何とか定員を満たしている状態でした。数学と英語の教員にも声をかけ、進学向けの補習を一齐に始めたのです。また、部活動で忙しく、進学補習へ参加できない生徒のため

に、自学自習できる教材プリントを週に二回、昇降口で配布を始めました。これには、補習の時に声をかけた数学と英語の先生も同じ取り組みをしてくれ、進学へ向けて勉強する雰囲気が高まりました。私が作成したプリントは、センター試験の過去問を一回出題し、次のプリントの裏面に前回の問題の詳細な解答を掲載し、自学自習できるようにしたものです。特に解答については、化学が苦手な生徒にも配慮し、問題集の解答をそのまま載せるのではなく、すべての計算を省略せずに、それを読めばどのように考えて解答しているのかわかるように、毎回自分で解答を作成して配布しました。三年生が一、二年生に合格体験を話す行事で、私のそのプリントに毎回取り組んだおかげで、センター試験では満点の百点を取ることができたと、感謝の言葉をもらいました。

(二) 大学進学に向けての進路指導

進学校なので、理科や数学の先生は理系クラスの担任を持ちます。私は自身が理系大学の受験を経験していることから、具体的なアドバイスも系統的にすることができました。また、将来は理系の研究職に就きたいという生徒のために、大学時代の友人で大学院を卒業し民間企業の研究開発部門にいる方を講師として招き、出前授業を実施したり、大学や大学院で学ぶことや現在の研究とのつながりなど、現場の研究職の生の声を聴かせました。その友人の一人は、テレビのCMにも出演しており、その動画も生徒に見せて、興味関心を持たせました。

そのような取り組みの結果、自分が受験生の時には到底合格できなかった、京都大学や東京工業大学、東北大学等に生徒を合格させることができました。また、それまで十数人だった国公立大学の合格者を約四倍にまで増やすことができました。

(三) 部活動の取り組み

進学校で、軽音楽部もなかったため、教科指導と受験指導に力を入れることができました。しかし、前任教での軽音楽部顧問としての私の評判を聞きつけた生徒が、軽音楽同好会を作りたいたので、顧問を引き受けてほしいと言ってきたのです。もともと軽音楽部のない学校だったため、寝耳に水の話でしたが、熱意を感じたので、半年間私の指導に従い、しっかりと取り組んで、生徒会に同好会の設立を認めてもらうことができましたら、という条件で顧問を引き受けることにしました。生徒ははじめで真剣でした。どんなに厳しく指導しても、しっかりと取り組んでいたため、顧問を引き受けることにしました。様々な先生の反対もありましたが、一年間同好会として活動した姿勢を見てもらい、一年後には正式な部活として認められました。文化祭や後夜祭では、なかなかの評判になり、次年度からは文化祭を見て軽音楽部に入るためにこの高校を選んだという生徒が多数入学してくるようになってきました。

軽音楽部の実績としては、全国大会に出場し、全国四位となる生徒が出ました。その生徒は現在、プロのギタリストとして活躍しています。また、東北大学に進学した軽音楽の部長は、大学で先輩のバンドに引き抜かれ、そのバンドでメジャーデビューを飾りました。私もそのCDを持っていきます。そして現在私は、埼玉県高等学校軽音楽連盟の会長をしております。

【主幹教諭として】

進学実績の向上と部活動の評判もあり、生徒募集倍率も定員を数十名超えるまでになりました。

そして、管理職の先生方から、管理職試験を受けるよう勧められ、受けることを決意しました。教科指導と部活動の指導が楽しく、管理職試験の勉強に時間を割くことが困難でしたが、何とか平成十九年に管理職試験に合格し、二十年度から主幹教諭となりました。分掌では教務主任を務めるようになり、それまで自分の持ち場をしっかりとやっていけばよかった立場から、学校運営を担う立

場に変まりました。

主幹教諭として二校経験しましたが、いずれも教務主任を務めました。そこでも力を入れたのは、生徒募集です。先生方には中学校を回ってもいい、私は主に学習塾を回り、学校の良いところをPRし、学校説明会の参加者を増やしました。その中でも、学習塾等が主催の説明会では私が話をしますが、高校で実施する説明会では、誘導・受付から説明まで、できるだけ生徒にやってもらい、生徒の視点からの学校の良さをPRしてもらいました。中学生に対しては、教員の言葉よりも生徒からの言葉の方が響くと考えたからです。

生徒募集に力を入れ、募集倍率が上がると、学校は目に見えて良くなっていきます。そうすると学校への評価も上がり、ますます募集倍率も安定してきます。

また、主幹教諭として大切なことは、校長、教頭と綿密な打ち合わせをして、先生方にわかりやすく学校経営方針とその方策を伝えることだと考えます。常日頃から、アンテナを高くして、先生方とコミュニケーションを図ることにより、何かの時

に協力してくれる先生を増やすことが大切です。

【管理職として】

(一) 特別支援学校の教頭として

最初に教頭として着任したのは、特別支援学校でした。わからないことも多く、とても勉強になりました。高校とは異なり、小学一年生から高校三年生までの年齢の生徒がおり、行事も多く、楽しい経験でした。

発達障害や自閉症のことを学ぶと、普通高校でも、自閉症スペクトラムや軽度発達障害の生徒がある程度の割合で存在しているというデータがありました。実感として普通高校にも、何度提出物を出すように指導しても忘れてしまう生徒や、英単語の小テストで何度補習課題をやってもアルファベットの「b」と「d」の区別ができない生徒がいます。その生徒たちは、さぼっているのではなく、その生徒の持っている特性のためなのだと、今は理解しています。その時にはわかりませんでした。その生徒にとって、とてもつらい指導をしていたのかもしれないと反省

しました。また、進学校であっても、アスペルガー症候群と思われる生徒がいました。その時に今のような知識があれば、もう少し違った指導ができたのではないかと思います。研修の重要性をつくづく感じました。

(二) 普通科の高校の教頭として

その後、普通科の高校二校で教頭として着任しました。特別支援学校で研修の重要性を知ったため、高校に赴任した時、特別支援学校のコーディネーターの先生に講師を依頼し、高校の先生に向けて研修を実施しました。また、気になる生徒の様子を観察してもらい、どのように指導していったらよいのか、アドバイスをもらう取り組みをしました。

その時に感じたのは、教頭として学年主任の先生や分掌主任の先生としっかりコミュニケーションをとることも大切ですが、生徒や先生方の情報を知りたいときは、養護教諭の先生に聞くのが最適だということでした。生徒も先生も、養護教諭の先生には何かと相談に行くため、最も情報を持っているのが、養護教諭の先

生です。日ごろからしっかりとコミュニケーションをとっておきましょう。校長となった今でも、定期的に保健室に行き、情報を収集するようにしています。

(三) 校長として

令和二年の四月に校長として現在の高校に着任しました。三月から新型コロナウイルス感染症のための緊急事態宣言に伴う臨時休校となり、何とか入学式は実施できましたが、正常な教育活動が再開したのは六月からでした。

様々な行事が中止になり、その判断だけでも大変な日々を送っています。この後どうなるかはわかりませんが、歴史に残る状況の中で、日々生徒と先生方の命を守ることを第一に考え、校務に邁進してまいります。

【おわりに】

今回、東洋大学教職課程機関誌「パイディア」の原稿依頼を受けました。パイディアに寄稿するのは二回目です。あと一年で定年を迎える

にあたり、自分の教育実践を振り返る良い機会を与えていただいたと感じています。

教職を目指すのが母校東洋大学の学生諸君、しっかりと頑張ってください。私のように力がない人間でも、一生懸命頑張れば、校長として教育に貢献することができます。教員という仕事は「ブラック」だという人もおられますが、一生の仕事として選んで悔いがない、とてもやりがいのある仕事です。ぜひ一人でも多くの学生が教員という夢をかなえられるよう、これからも応援してまいります。長文にお付き合いいただきありがとうございます。